

■ ドル/円の先高観強まる！？

前回更新分の本欄で、7月の日銀会合について事前に「いわゆる『大山鳴動して鼠一匹』という結果になれば、あらためてドル/円、クロス円は買い直されやすくなる」などと予想した。結果は、概ね予想した通りであったと言える。

既知のとおり、日銀は今回の会合で長期金利の変動を一定程度容認する方針を示す一方、初のフォワードガイダンスの手法を導入して緩和継続の意思をあらためて強く示した。加えて、上場投資信託（ETF）の購入方法を見直す方針も明らかにしたが、その点も含めて今回の決定は大方市場関係者らによる事前の見立て通りとなった。

個人的な印象を述べれば、やはり日銀の政策は「かなり以前から、かなり手詰まりの状態に陥っている」と言え、やはり「当分の間」はどうにも変更・修正しようがないと言った状況にあると見られる。正味のところ、金融政策のできることに自ずと限界があるのであって、もはや日銀は限界に至るまで十分に手を尽くしてきたと考えられる。

なお、フォワードガイダンスの導入については、多分に海外勢を意識したものと考えられ、その実、日銀の決定を受けて新発10年債利回りが大きく上昇した場面においても、外国為替市場では円安・ドル高の流れが一旦強まることとなったのである。

その結果、ドル/円の7月の月足ロウソクは陽線を描き、その終値は111.81円となった。この終値水準は、一目均衡表の月足「雲」上限の水準にやや届かないものの、31カ月線や62カ月線が位置する水準を上回るには十分であった（下図参照）。

つまり、これでドル/円の月足・終値は2カ月連続して31カ月線を上抜けたことになる。その点は基本強気のシグナルと捉えたい。また、以前から注目している2015年6月高値以来の三角保ち合い（トライアングル）を上放れる流れと見ることもできるように思われ、その点も月足の「運行線」の上抜けと併せて強気の見方につながりやすい。

もちろん、この8月以降に月足「雲」を明確に上抜ける展開となれば、なおさらドル/円の上値に対する期待は拡がりやすくなる。やはり、さしあたっては年初来高値の113.40円処を意識し、同水準を上抜ければ次に115円手前あたりの水準を試す展開となる。

目先は、来週9日に控える日米貿易協議（FFR）の行方に対する警戒が円の下値を支える可能性が高いと見られるが、同イベント通過後は緩やかに円安・ドル高へと傾きやすくなると個人的には見る。

